

Ⅲ. 結果の概要（市民調査）

1 男女の平等感【問6】

- 社会全体の男女の平等感について、「男性の方が優遇されている」と「どちらかといえば男性の方が優遇されている」を合わせた「男性優遇」は男女ともに6割から7割となっている。ただし女性では「男性優遇」が男性より10.7ポイント高くなっている。
- 各領域の中で、男女とも「平等」が「男性優遇」を上回っているのは、教育のみである。男女とも4割以上が「平等」と答えており、「男性優遇」は男女とも1割程度となっている。
- 一方「政治の場」および「社会通念・慣習・しきたり」では、女性7割台、男性6割台が「男性優遇」となっており、次いで「職場で」では、女性5割台、男性4割台が続いている。
- 男女で「平等」の認識で差がでている領域がある。家庭生活、法律・制度、地域生活である。家庭生活では「平等」と答えた男性は4割以上だが、女性では2割半である。また、法律・制度では「平等」と答えた男性は3割強だが、女性では2割弱となっている。
- 前回調査の結果に比べ、「男性優遇」が女性で5.3ポイント、男性で2.9ポイント高くなっている。「平等」「女性優遇」については、大きな差はみられない。

2 日常生活や社会全般についての考え方【問7】

- 前回調査（平成27年度）の結果と比べ、全体的に男女の固定的な性別役割を肯定する考えより固定的な考え方にとらわれない考え方に変化してきている。
- 「妻や子どもを養うのは、男性の責任である」の「肯定派」がほぼすべての年代で、男性の割合が女性の割合を20ポイント以上上回っており、男性でより固定的な性別役割分担意識がうかがえる。しかし、前回の調査と比較すると、男女ともに肯定派は10ポイント以上低下しており、固定的な考え方にとらわれない考え方に変化してきている。
- 結婚について、「結婚は個人の自由であるから結婚してもしなくてもどちらでもよい」では、男女ともいずれの年代でも「肯定派」が多く、割合は若い年代ほど高くなっている。また、「結婚しても必ずしも子どもを持つ必要はない」では男女とも、50歳代以下のすべての年代で「肯定派」が多く、若い年代ほどその割合は高くなっている。「結婚したら、妻が夫の姓を名乗るのは当然だ」は前回調査と比較して男女ともに大きく低下し、固定的な考え方にとらわれない考え方に変化してきている。
- 子どもを育てることについて、「自分の子どもには、男女にかかわらず同程度の教育や学歴を身につけさせたい」は男女とも「肯定派」が8割台となり、教育においては男女平等の意識が共通していることがうかがえる。一方子育ての過程について、「子どもが3歳ぐらまでは母親のもとで育てるのがいい」は男女とも30歳代を除くすべての年代で「肯定派」が最も多くなっており、3歳までの子育てについて固定的な役割意識が強いことがうかがえる。ただし、男女とも30歳代では「否定派」、「肯定派」、「どちらともいえない」がどれも3割前後となり、意見は拮抗し意識が分散傾向にあることがうかがえる。
- 「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てる方がよい」は、女性では、50歳代以下のすべての年代で「否定派」が多くなっているが、男性では、29歳以下では「否定派」が最も多い一方、30歳代以上はすべての年代で「肯定派」が多い。ここでは男女の意見の相違が見られる。ただしこの結果は前回調査と比較すると男女ともに「肯定派」が大きく低下し、固定的な考え方にとらわれない考え方に変化してきている。

3 家庭生活について

(1) 性別役割分担意識【問8】

- 男女とも「男性は仕事、女性は家事・育児」という考え方に対して、「賛成」と「どちらかといえ

ば賛成」を合わせた「賛成派」より「反対」と「どちらかといえば反対」を合わせた「反対派」の方が多くなっている。

- 女性は「反対派」が「賛成派」より 30.5 ポイント多くなっているのに比べ、男性では「反対派」が多いものの「賛成派」との差は 3.3 ポイントと僅差となっている。
- 前回調査と比べ、男女ともに「賛成派」が 20 ポイント以上減少し、「反対派」が 10 ポイント以上増加している。

(2) 性別役割分担意識について賛成の理由【問 8-1】

- 男女とも「家事・育児・介護と両立しながら妻が働き続けることは大変だと思うから」が最も多く、さらに女性の方が 8.7 ポイント高くなっている。次いで、女性では「子どもの成長にとってよいと思うから」、男性では「役割分担をした方が効率がよいと思うから」が続いている。
- 前回調査の結果に比べ、「個人的にそうありたいと思うから」は女性で 9.9 ポイント低下し、「役割分担をした方が効率がよいと思うから」は、女性で 5.7 ポイント、男性で 6.5 ポイント上昇している。

(3) 性別役割分担意識について反対の理由【問 8-2】

- 女性では「仕事に適した女性や、家事・育児に適した男性もいるから」が最も多く、次いで「男女がともに仕事と家庭に関わる方が、各個人や家庭にとってよいと思うから」となっている。一方、男性では「男女がともに仕事と家庭に関わる方が、各個人や家庭にとってよいと思うから」が最も多く、次いで「仕事に適した女性や、家事・育児に適した男性もいるから」となっている。どちらの項目も女性の方が 10 ポイント以上高くなっている。
- 前回調査の結果に比べ、「男女がともに仕事と家庭に関わる方が、各個人や家庭にとってよいと思うから」は女性で 4.6 ポイント、男性で 6.5 ポイント低下している。一方、「男女平等に反すると思うから」は女性で 6.3 ポイント、男性では 16.7 ポイントと大きく上昇している。

(4) 家庭での分担

①理想【問 9】

- ほぼすべての項目で男女ともに「夫婦・カップルで同じくらい」が最も多くなっている。しかし、そのいずれの項目も、「夫婦・カップルで同じくらい」の割合は、男性より女性の方が高くなっている。
- 「生活費を得る」では、女性で「夫婦・カップルで同じくらい」が、最も多いが、男性では「主に夫・パートナー」が最も多くなっている。
- 「日常の家事（食事のしたく、掃除、洗濯）」では、男女とも、60 歳代以下で「夫婦・カップルで同じくらい」が最も多く、その割合は年代が若くなるほど高くなっている。
- 「育児」ではほぼすべての年代で「夫婦・カップルで同じくらい」が最も多く、おおむね若い年代ほどその割合が高くなっている。女性はいずれの年代も「夫婦・カップルで同じくらい」が男性の割合よりも高くなっているが、その男女差は 40 歳代以下の若い年代で大きい傾向が見られる。
- 「高齢者、病人の介護・看護」では、男女とも、すべての年代で「夫婦・カップルで同じくらい」が最も多くなっている。女性はいずれの年代も「夫婦・カップルで同じくらい」が男性の割合よりも高くなっている。
- 前回調査の結果に比べ、「高齢者、病人の介護・看護」以外のすべての項目で、男女とも「夫婦・カップルで同じくらい」が 10 ポイント以上上昇している。

②現実【問9】

- ほぼすべての項目で男女ともに「主に妻・パートナー」が最も多くなっている。家計の管理をのぞき、いずれの項目も「主に妻・パートナー」の割合は、男性より女性の方が高くなっている。
- 「生活費を得る」では、男女とも「主に夫・パートナー」が最も多く、7割弱（男性）から7割台（女性）の割合を占めている。
- 「家計の管理」「日常の家事（食事のしたく、掃除、洗濯）」「育児」「高齢者、病人の介護・看護」では、男女とも「主に妻・パートナー」が最も多くなっている。特に、「日常の家事（食事のしたく、掃除、洗濯）」「育児」では男女ともに「主に妻・パートナー」が7割程度と高い傾向にある。
- 「自治会、町内会など地域活動への参加」は、女性ではすべての年代で「主に妻・パートナー」が最も多く、特に40～50歳代で6割台と高い傾向にある。しかし、男性では、年代別で傾向が異なる。
- 前回調査の結果に比べ、「高齢者、病人の介護・看護」で、男女とも「主に妻・パートナー」が10ポイント以上上昇し、また、「家計の管理」では、女性で「主に妻・パートナー」が10ポイント以上低下している。

4 地域活動について

（1）地域活動の参加状況【問10】

①現在参加している活動

- 現在参加している活動は、男女とも「自治会・町内会の活動」が最も多く、次いで女性では「PTAや子ども会の活動」、男性では「地域における趣味・スポーツ・学習の活動」となっている。
- 全体では「特になし」が男女ともに6割台と高くなっているが、29歳以下では「特になし」が男女とも8割台、40～60歳代の男性で7割台とさらに高い傾向がある。

②今後参加したい活動

- 今後（または引き続き）参加したい活動は、男女とも「地域における趣味・スポーツ・学習の活動」が最も多く、次いで、「自治会・町内会の活動」となっている。
- 現在の参加状況に比べ今後参加したい希望が多かった活動は、女性では、「清掃・美化や環境保全のための活動」、「NPO（非営利団体）やボランティアの活動」、「高齢者や障がい者などのための福祉活動」、男性では、「防犯活動や防災活動」、「まちづくりに関する活動」となっている。
- 全体では「特になし」が男女ともに5割台と高くなっているが、29歳以下では男性が7割台、女性が6割台、40～50歳代の男性では6割台とさらに高い傾向がある。

（2）地域活動に参加したくない理由【問10-1】

- 女性は「参加するきっかけがないから」が最も多く、次いで「仕事が忙しいから」、「あまり関心がないから」と続いている。
- 男性は「仕事が忙しいから」が最も多く、「あまり関心がないから」、「参加するきっかけがないから」と続いている。
- また、女性は「家事・育児・介護で忙しいから」が男性に比べ8.4ポイント高くなっており、男性では「活動に魅力がないから」が女性に比べ5.2ポイント高くなっている。

5 男性の家事・子育て・介護・地域活動の参加について

(1) 男性が家事・子育て・介護・地域活動に参加していくために必要なこと【問 11】

- 男女とも「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかる」が最も多くなっており、次いで「職場の上司や同僚が、男性の家事・子育て・介護・地域活動に理解を示す」となっている。
- ほぼすべての項目で女性の割合が男性より多くなっているが、特に「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかる」「職場の上司や同僚が、男性の家事・子育て・介護・地域活動に理解を示す」「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくす」「社会の中で男性による家事・子育て・介護・地域活動についてもその評価を高める」「年配者やまわりの人が、夫婦の役割分担などについての当事者の考え方を尊重する」では女性のほうが男性より 10 ポイント以上高くなっている。

6 仕事について

(1) 女性の働き方について【問 12】

- 男女とも「結婚や出産に関わらず、仕事を続ける方がよい」の割合がすべての項目の中で最も多いが、男性は女性より 8.9 ポイント低くなっている。男女とも、「育児の時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続ける方がよい」、そして「育児の時だけ一時やめ、その後はフルタイムで仕事を続ける方がよい」と続いている。
- 「子どもができるまで仕事をもち、子どもができたなら家事や育児に専念する方がよい」は、女性 7.3%、男性 12.7%と、男性の方が 5.4 ポイント高くなっている。
- 女性 40.1%、男性 44.7%が、女性の働き方として、結婚時や出産時には、仕事を辞めること、あるいは仕事につかないことを肯定しており、「結婚や出産に関わらず、仕事を続けるほうがよい」を上回っている。

(2) 仕事における平等感【問 13】

- 男女ともに、全項目で「平等」の割合が最も多い。女性で「平等」の割合が最も多い項目は「働き続けやすい雰囲気」で次いで「研修の機会・内容」となっている。その後「仕事の内容、仕事の分担」「採用・募集」に続いている。一方男性で「平等」の割合が最も多い項目は「研修の機会・内容」次いで「働き続けやすい雰囲気」となっている。その後「能力評価」「昇給や賃金水準」に続いている。
- 男女ともに、ほぼすべての項目で「男性優遇」の割合が「女性優遇」の割合より高くなっている。女性で「昇給や賃金水準」「昇進・昇格・管理職への登用」「能力評価（業績評価・人事考課など）」、男性で「採用・募集」「昇進・昇格・管理職への登用」が高くなっている。特に「昇給や賃金水準」は、女性が男性の割合より 13.6 ポイント高く、「採用・募集」は、男性が女性の割合より 10.5 ポイント高くなっている。
- 「出産・育児・介護休暇のとりやすさ」のみで「女性優遇」の割合が「男性優遇」の割合を上回っている。
- 前回調査の結果に比べ、男女ともに、全項目で「平等」の割合が上昇し、女性の「出産・育児・介護休暇のとりやすさ」以外の全項目で「男性優遇」の割合が低下している。

(3) 仕事や家事・育児・介護に要する時間【問 16】

①仕事

- 平日は、男女ともに「なし」が4割弱から5割弱で最も多いが、女性の方が10.5ポイント高い。次いで、男女ともに「8時間～10時間未満」となっている。この結果は今回調査の回答者の年齢分布を反映していると思われる。
- 休日も、男女ともに「なし」が7割弱から8割弱で最も多いが、男性より女性の方が8.5ポイント高い。この割合は平日より大幅に高い。次いで、男女とも「4時間未満」となっている。
- 休日は正規雇用で、男女ともに「なし」が6割台で最も多く、「4時間未満」が2割台が続いている。非正規雇用では、「なし」が女性で5割台、男性で4割台である。

②家事・育児・介護など

- 平日は、女性では「5時間以上」、「2時間～3時間未満」、「1時間～2時間未満」の順に多くなっているが、男性では「ほとんどない」が最も多く、「30分～1時間未満」が続いている。
- 雇用形態別では、平日は、女性の正規雇用では「30分～1時間未満」「1時間～2時間未満」が最も多く、非正規雇用では「1時間～2時間未満」、非就労者では「5時間以上」が最も多くなっている。
- 休日は、女性では平日と比べ大きな差はみられない。
- 休日は、女性の正規雇用では「1時間～2時間未満」が最も多いが、「5時間以上」が僅差で続いている。非正規雇用、非就労者ともに「5時間以上」が最も多い。
- 男性でも平日と比べ大きな差はみられない。しかし、「5時間以上」が、平日に比べて5.7ポイント高くなっている。
- 休日も、男性は雇用形態を問わず「ほとんどない」が最も多いが、正規雇用では「5時間以上」が続いている。非正規雇用、非就労者では、「30分～1時間未満」が続いている。

(4) 希望する暮らし方【問 17】

- 男女ともに「仕事と家庭生活をともに優先したい」が最も多く、次いで、「家庭生活を優先したい」であり、その後「仕事と家庭と地域・個人の生活をともに優先したい」が続いている。
- 男女ともに、正規雇用、非正規雇用では「仕事と家庭生活をともに優先したい」が最も多く、非就労者では「家庭生活を優先したい」が最も多くなっている。
- 前回調査の結果に比べ、女性は「仕事と家庭生活をともに優先したい」が5.4ポイント上昇し、「家庭生活と地域・個人の生活をともに優先したい」が4.5ポイント低下している。男性では大きな変化はみられない。

(5) 現実の生活【問 18】

- 女性では「家庭生活を優先している」が最も多く、次いで「仕事と家庭生活をともに優先している」、「仕事を優先している」の順が続いている。男性では「仕事を優先している」が最も多く、次いで「家庭生活を優先している」、「仕事と家庭生活をともに優先している」の順が続いている。
- 正規雇用では、男女とも、「仕事を優先している」が4割台で最も多く、「仕事と家庭生活をともに優先している」が3割台が続いている。非正規雇用では、女性では「仕事と家庭生活をともに優先している」が36.4%で最も多く、男性では「仕事を優先している」が47.2%で最も多い。非就労者では、男女とも、「家庭生活を優先している」が最も多く、女性で60.7%、男性で42.4%となっている。

- 前回調査の結果に比べ、女性では、大きな変化はみられなかったが、男性では、「仕事を優先している」が5.9ポイント低下している。

(6) 今後の就労意向【問14】

- 男女とも、「仕事につきたいと思わない」が女性3割半、男性4割半で最も多く、女性に比べ男性の方が9.3ポイント高くなっている。この結果は今回調査の回答者の年齢分布を反映していると思われる。
- 「ぜひ仕事につきたい」と「できれば仕事につきたい」を合わせた「仕事につきたい」の割合は、女性29.9%、男性25.3%で、女性の方が4.6ポイント高くなっている。
- 40歳代以下の女性では、「仕事につきたい」の割合がいずれの世代においても50%を超えている。

(7) 働いていない理由【問14-1】

- 女性では「家事や育児をしているから」が最も多くなっており、次いで「その他」、「応募しても断られるから」、「健康上の理由で」の順に多くなっている。
- 男性では「定年退職したから」が最も多く、次いで「応募しても断られるから」「健康上の理由で」「やりたい仕事がないから」が並んでいる。

(8) 仕事につく上での不安【問14-2】

- 男女とも「自分の健康状態や体力」が最も多く、女性で4割強、男性で5割台となっている。次いで、女性では、「職場の人間関係がうまくいくか」、「賃金や通勤距離など、望む労働条件が得られるか」、「年齢制限に適合するか」が4割台で続いている。男性では「職場の人間関係がうまくいくか」と「自分のしたい仕事につけるか」が4割台で続いている。
- 男女差の大きい項目をみると、「賃金や通勤距離など、望む労働条件が得られるか」は19.4ポイント、「家事・育児・介護との両立ができるか」は19.9ポイント、女性の方が高く、「自分のしたい仕事につけるか」は11.9ポイント、「自分の資格や能力が通用するか」は10.8ポイント、男性の方が高くなっている。
- 前回調査の結果に比べ、女性では、「家事・育児・介護との両立ができるか」が19.3ポイント低下し、「賃金や通勤距離など、望む労働条件が得られるか」が24.7ポイント、「職場の人間関係がうまくいくか」が15.0ポイント、上昇している。男性では、「職場の人間関係がうまくいくか」が15.9ポイント上昇している。

(9) 働く上で大切なこと【問15】

- 女性では、「生活状況に応じて柔軟な働き方を選ぶことができる」が最も多く、「男女が協力して家事や育児・介護などをする」、「介護・育児休業がとりやすい職場の雰囲気がある」が続いている。
- 男性では、「社会保障が整っている（厚生年金など）」が最も多く、「生活状況に応じて柔軟な働き方を選ぶことができる」、「男女が協力して家事や育児・介護などをする」が続いている。
- 男女を比較すると、「生活状況に応じて柔軟な働き方を選ぶことができる」「男女が協力して家事や育児・介護などをする」「介護・育児休業がとりやすい職場の雰囲気がある」「職場に介護・育児休業制度がある」「残業がない、あるいは少ない」の5項目で、女性の方が10ポイント以上高くなっている。
- 前回調査の結果に比べ、男女とも「保育所・幼稚園・こども園や学童保育などの保育環境が整っている」「職場での男女間の格差がない（募集・採用や配置・昇進など）」が10ポイント以上高くなっており、男性では「男女が協力して家事や育児・介護などをする」でも10ポイント以上上昇し

ている。

7 男女の人権について

(1) 配偶者や交際相手からの暴力に関する相談窓口の認知状況【問 19】

- 男女ともに「具体的な名称は知らないが、相談窓口があることは知っている」が最も多くなっており、男女間での差はあまりない。
- 「豊中市配偶者暴力相談支援センター」の認知率は女性 6.5%、男性 9.6%となっている。

(2) 配偶者等からの暴力（ドメスティック・バイオレンス／DV）に対する認識【問 20】

- 「どんな場合でも暴力にあたると思う」の割合が高いのは、男女とも「命の危険を感じるようなことをされる」である。また、多少順位に差はあるものの、「あなたを脅すために子どもに暴力をふるう」「骨折させられたり、鼓膜をやぶられたりする」「子どもが見ている前であなたに暴力をふるう」といった身体的暴力に関する項目が上位4項目となっている。
- 「どんな場合でも暴力にあたると思う」の割合は、いずれも男性より女性の方が高いが、「実家の親・きょうだい・友人との付き合いをいやがられたり禁止されたりする」で 16.5 ポイントと差が最も大きい。男女で認識に差がある。
- 女性では「何を言っても長時間無視される」「大声でどなられる」以外の項目は「どんな場合でも暴力にあたると思う」が5割以上を占めている。
- 男性では「何を言っても長期間無視される」「大声でどなられる」「あなたの交友関係や電話・メール・SNSを監視されたり、外出を制限される」「実家の親・きょうだい・友人との付き合いをいやがられたり禁止されたりする」「十分な生活費を渡さない」「子どもと仲良くするのを嫌う」以外の項目は「どんな場合でも暴力にあたると思う」が5割以上を占めている。
- 前回調査の結果に比べ、女性では「避妊に協力しない」以外の項目で低下している。男性は、「避妊に協力しない」が 6.9 ポイント上昇、その他、「あなたが見たくないのに、ポルノビデオやポルノ雑誌を見せられる」「あなたの意に反して性的な行為を強要される」「お金を取り上げたり、預貯金を勝手におろされたり、借金を強要されたりする」が微増している以外は低下している。ただ、前回調査より、今回調査のほうが無回答の割合が多いため、単純な比較には注意が必要である。

(3) 配偶者等からの暴力（ドメスティック・バイオレンス／DV）の経験【問 20】

- 女性の2割、男性の1割はいずれかの暴力の被害経験がある。
- 被害経験のある暴力の種類では、男女とも精神的暴力（女性 18.4%、男性 11.4%）が最も多く、身体的暴力（女性 6.6%、男性 2.0%）、経済的暴力（女性 5.4%、男性 1.8%）、性的暴力（女性 3.2%、男性 0.7%）の順で続いている。
- 女性では、40～60歳代で「経験あり」が20%を超えている。

(4) 配偶者等からの暴力（ドメスティック・バイオレンス／DV）を受けたときの相談状況【問 20-1】

- 女性は、相談先として「家族や親族」が3割台と最も多く、「友人・知人」が2割強となっている。家族や親族への相談が男性に比べ18.8ポイント高くなっている。男性では、「友人・知人」が2割強、家族や親族がほぼ1割半となっている。
- 女性で「相談しなかったが、しなかった（できなかった）」が12.1%であった。男性では「相談しようと思わなかった」が59.3%であった。
- 前回調査と比べて、公的な相談機関（豊中市配偶者暴力相談支援センター、警察、市役所等）へ相談したことがある人の割合が微増していた。

(5) 相談してよかったと感じたこと【問 20-2】

- 「相談してよかったことはない」と回答したのは女性4.1%、男性5.0%であり、相談してよかったと感じている割合が男女ともに多くなっている。
- 女性では、「気持ちが楽になった」が最も多く、「一人ではないと感じられた」、「具体的な対応や方法の提示をしてくれた」「自分が悪いのではないと理解ができた」の順で続いている。
- 男性では、「気持ちが楽になった」が最も多く、次いで「一人ではないと感じられた」「自分に何が起きているのかが理解できた」が並んでいる。
- 男女差をみると、「自分が悪いのではないと理解ができた」は女性が11.1ポイント、「自分に何が起きているのかが理解できた」は男性が18.8ポイント高くなっている。

(6) 相談しなかった理由【問 20-3】

- 相談しなかった理由は、男女とも「相談するほどのことではないと思ったから」が最も多く、次いで、女性では「相談してもむだだと思ったから」、男性では「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」が続いている。
- 「その他」と無回答を除くすべての項目で女性の方が高くなっており、特に「他人を巻き込みたくなかったから」「相談してもむだだと思ったから」「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」で10ポイント以上の差となっている。

(7) セクシュアル・ハラスメントの認識【問 21】

- セクシュアル・ハラスメントの認識については、男女ともに「キスやセックスの強要など性的な行為を迫られる」「故意に身体にふれられる」「昇進や商取引などを利用して性的な関係を迫られる」「着替え中の更衣室に、異性に入られる」がいずれも7割を超えており、上位4位を占めた。
- 調査項目について「どれもあてはまらない」と女性5.9%、男性7.5%が回答している。
- 男女で比較すると、「どれもあてはまらない」を除いて、いずれの項目も女性の方が高く、特に「身体をじろじろ見られる」で12.2ポイントと差が大きい。
- 前回調査の結果に比べ、男女ともすべての項目で10ポイント以上上昇しており、セクシュアル・ハラスメントに対する認識が高くなっている。

(8) セクシュアル・ハラスメントの経験【問 21】

- 職場でセクシュアル・ハラスメントを受けた経験について、女性では「忘年会などでお酌・デュエット・ダンスなどを強要される」(16.5%)、「性的な冗談やひわいなことを話題にされる」(13.3%)、「故意に身体にふれられる」(12.2%)、「容姿について、あれこれ聞かれる・話題にされる」(11.8%)

が1割を超えている。

- 男性では「容姿について、あれこれ聞かれる・話題にされる」が5.3%で最も多い。
- 学校でセクシュアル・ハラスメントを受けた経験については、男女とも「容姿について、あれこれ聞かれる・話題にされる」が最も多く、女性で6.9%、男性で5.3%となっている。
- 女性では、29歳以下で「容姿について、あれこれ聞かれる・話題にされる」が25.0%、「性的な冗談やひわいなことを話題にされる」(14.3%)、「身体をじろじろ見られる」(12.5%)も10%を超えている。
- 地域等でのセクシュアル・ハラスメントの経験については、女性で「身体をじろじろ見られる」5.0%が最も多く、「故意に身体にふれられる」(4.0%)、「容姿について、あれこれ聞かれる・話題にされる」(3.0%)が次いでいる。

(9) 男性で「男性はつらい」と感じる理由【問25】

- 「なにかにつけ『男だから』『男のくせに』と言われる」「仕事の責任が大きい、仕事できて当たり前だと言われる」がともに23.0%で最も多く、次いで、『妻子を養うのは男の責任だ』と言われる」、「自分のやりたい仕事を自由に選べないことがある」が続いている。
- ほぼ半数が、『男性はつらい』と感じたことはない』と答えた。ただし、年代別にみると30歳代以下の若い年代ではそれ以上の年代と比べつらいと感じる割合が高くなっている。
- 前回調査の結果に比べ、『男性はつらい』と感じたことはない』が12.6ポイント上昇している。

8 LGBTをはじめとする性的少数者について

(1) LGBTをはじめとする性的少数者の認知状況【問22】

- 男女とも「言葉も意味も両方知っている」が最も多く、男女ともに5割台だが、女性の方が7.2ポイント高い。次いで「言葉だけは知っている」女性2割強、男性3割台、「言葉も知らない」男女とも1割台と続いている。
- 女性では、「言葉も意味も両方知っている」は、おおむね年代が若くなるほど高く、29歳以下で8割台、30～50歳代は7割前後である。
- 男性でも、「言葉も意味も両方知っている」は、おおむね年代が若くなるほど高い傾向があり、29歳以下で7割台、30～50歳代は5割から6割台である。

(2) 身体の性・心の性・性指向に悩んだ経験【問23】

- 身体の性・心の性・性指向に悩んだ経験は、男女とも「ない」が9割台を占めているが、「ある」は女性で2.4%、男性で3.3%となっている。
- 女性では、「ある」が、29歳以下では19.6%と年代の中で最も多く、30～40歳代で2.0%、50歳代以上では1%未満である。
- 男性でも、「ある」が29歳以下では12.5%と年代の中で最も多く、30歳代で6.5%、40歳代と60歳代で2.5%と続いている。

(3) LGBTをはじめとする性的少数者にとっての社会の生活のしづらさ【問24】

- 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた「そう思う」は、男女ともに8割台である。男性では、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせた「そう思わない」

が 14.7%で、女性の 9.0%を 5.7 ポイント上回っている。

- 男女とも 60 歳代以下のすべての年代で「そう思う」は 8 割強～9 割強だが、70 歳以上では男女とも 6 割台となっている。

(4) 生活がしづらい社会になっている理由【問 25】

- 生活がしづらい社会になっている理由については、男女とも、「カミングアウト後、周囲の理解が得られない・態度が変化する」が最も多く、次いで「法整備が進んでいない」が続いている。
- いずれの項目でも、女性の方が男性より割合が多く、特に「夫婦と同様に、同性パートナーとの関係を認めてもらえない」「申請書などの性別について記入を求められる」「自認する性として利用できる施設・設備が少ない（トイレ・更衣室など）」「自認する性と異なるふるまいを強要される（服装など）」では、10 ポイント以上の差となっている。

9 男女共同参画社会の実現について

(1) 市が力をいれていくべきこと【問 26】

- 女性では、「子育てや介護中であっても仕事が続けられるよう支援する」が最も多く、次いで、「子育てや介護などでいったん仕事を辞めた人の再就職を支援する」、「高齢者の施設や介護サービスを充実させる」、「保育の施設・サービスを充実させる」が続いている。
- 男性においても、女性が上位 4 位に挙げた項目が、順位は異なるものの上位を占めている。
- ほとんどの項目において女性の割合の方が上回っており、特に、「子育てや介護などでいったん仕事を辞めた人の再就職を支援する」「子育てや介護中であっても仕事が続けられるように支援する」「女性の能力開発や就労支援を充実させる」では、10 ポイント以上の差がみられる。
- 男性の方が高いのは、「市の政策・事業に対して、市民の声を聞く場や制度を充実させる」「男女共同参画に努力している企業を市民に対して紹介したり表彰したりする」で、男女で 4～6 ポイント差がみられる。
- 前回調査の結果に比べ、男女とも「職場において男女の均等な取扱いが図られるよう企業などに働きかける」「女性に対する暴力の防止や被害者への支援を充実させる」が 5 ポイント以上上昇している。また、女性では、「お互いの性を尊重し、男女とも生涯を通じた健康づくりのための支援をする」「民間企業・団体などの管理職に女性の登用が進むように支援する」も 5 ポイント以上上昇している。

(2) 防災対策において、性別に配慮した対応が必要だと思う事【問 27】

- 男女とも「避難所の設備（男女別のトイレ・更衣室・授乳室・洗濯干場など）」が最も多く、次いで「災害時の救援医療体制（乳幼児・高齢者・障がい者・妊産婦のサポート体制）」、「避難所運営責任者に男女がともに配置され、運営や被災者対応に両方の視点が入ること」と続いている。すべての項目で男性に比べ女性の割合の方が高くなっている。

(3) 「とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ」利用状況【問 28】

- 「利用したことがある」は女性で 10.9%、男性で 5.5%、「利用したことはないが知っている」は女性で 28.2%、男性で 23.5%と、いずれも女性の方が高くなっている。また、「知らない」は女性 58.9%、男性 70.2%である。
- 女性では、「利用したことがある」「利用したことはないが知っている」をあわせた認知率は、50 歳

代が最も高く 48.7%、40 歳代と 60 歳代が 4 割台で続いている。

- 男性では、認知率は、30 歳代と 70 歳以上で 3 割台、その他の年代は 2 割台である

(4)「とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ」にあったら利用したいもの

【問 29】

- 女性では「女性の就業支援（再就職に向けてのパソコン講座など）」が最も多く、「相談サービス」、「男女共同参画に関する幅広い情報・書籍・資料の提供サービス」と続いている。
- 女性では、60 歳代以下では、いずれの年代も「女性の就業支援（再就職に向けてのパソコン講座など）」が 2～3 割で最も多く、29 歳以下で「女性の人材育成」、60 歳代で「男女共同参画に関する幅広い情報・書籍・資料の提供サービス」「講演会・シンポジウム・フォーラム」も 2 割台と高くなっている。
- 男性では、「男女共同参画に関する幅広い情報・書籍・資料の提供サービス」が最も多く、「男性向け講座」、「相談サービス」と続いている。
- 男性では、29 歳以下では「男女共同参画に関する幅広い情報・書籍・資料の提供サービス」「交流の場」(18.8%)、30 歳代では「交流の場」(26.1%)、40～50 歳代では「男性向け講座」が多くなっている。